

山口・島根県沖におけるシイラ・トビウオ類の 来遊の特徴* (抄録)

安 達 二 朗

山口・島根各統計情報事務所の農林水産統計によれば、1958年から1980年の23か年の山口・島根両県あわせてのシイラとトビウオ類の年平均漁獲量は、それぞれ2,800トンと2,000トンである。シイラおよびトビウオ類は夏季の短期間に漁獲されるものなので、夏季の魚類総漁獲量に占める割合は、きわめて高く両県の沿岸漁業に対する比重は大きいものがある。

1982年の夏季、山口・島根両県下のトビウオ・シイラ漁はきわめて不振に経過した。著者らは、この原因をさぐるための一つの手段として過去の漁獲記録を解析してみた。ここで得られた結果の一部である山陰沖におけるシイラとトビウオ類の来遊の特徴および水温とシイラ・トビウオの漁獲量との関係について報告する。

要 約

- 1) 対馬暖流域におけるシイラ漁獲量は年平均69,000トンで変動傾向はほぼ横ばい状態にある。トビウオ類漁獲量は年平均約8,800トンで、1962～1973年の多獲時代、1961年以前、1974年以後の少獲時代に分けることができる。
- 2) 山口・島根県ではシイラ漁獲量は、1968年を境として減少傾向にある。トビウオ類漁獲量は1971年頃までは増加傾向、それ以後は減少傾向にある。
- 3) シイラ漁獲量の各県間における相関性は、山陰(福岡・山口・島根・鳥取・兵庫)の各県が九州および若狭湾以北の県と無相関である。これはシイラの回遊特性によると考えられる。
- 4) トビウオ類漁獲量の各県間における相関性は、鹿児島県～青森県まで互いに隣接する県間での相関がある場合が多い。これはトビウオ類の回遊特性によると考えられる。
- 5) 山陰沖漁場での高温年、低温年によるシイラおよびトビウオ類の漁獲量に差は認められない。
- 6) 山口・島根県において、低温年にはトビウオ類漁獲量とシイラ漁獲量との間に正の相関関係が認められる。この関係は漁況予測に有効であろう。

* 日本海ブロック試験研究集録 第3号(日本海区水産研究所 1984)に発表した。